

幕末に活躍した坂本龍馬。彼は薩長同盟を結ばせ日本を海外のように文化的な国にしようとさせた人物ですが、彼がこのようになったきっかけは一人の宣教師と出会ったことでした。彼はキリスト教を学ぶことでヨーロッパなどの国がどうして発展したのか知ったのです。彼は土佐藩を脱藩し、ただの商人でしたが薩摩と長州の同盟を結ばせた・・・それだけ彼の生き方に対して信頼があり、その信頼の土台が聖書の言葉にあったのです。その坂本龍馬を殺したのは今井義郎という人物です。その時、西郷隆盛は、愛する竜馬を殺されたにも関わらず、彼を赦しました。隆盛には竜馬がもっていた聖書の精神が伝わっていたからです。また竜馬を殺した今井も最初は、キリスト教を迫害しようとしていましたが、後に、クリスチャンになり日本の農業のさきがけを作りました。一粒の麦が地に落ちること・・・これが坂本龍馬の死ですが、このことを通して西郷隆盛や多くの人が変わったのです。(ヨハネ12：24～)幕末の大きな歴史の変化には聖書の真理が土台となっていました。ですからこの国で自由を語るとき、聖書のことははずせません。自由というのは「自らの内側に与えられた意志によって行う」ということです。しかし私たちが思う自由は「自分が勝手に好きなことしたい」という自己中心の自由です。自己中心の自由は私たちを傷つけあい、たくさんの人の命が失われることとなります。私たちに今の自由を与えてくれた人たちは自らの信念を貫き自由を求めて戦った人たちばかりです。多くの人が命がけて何かを変えるために自由を求めて戦った・・・それが今の日本の土台になっていることを知って欲しいのです。しかし私たちはあまりにも自らの人生に自らを得ようとしています。世の中ではクリスマスを利用のために用いたりしていますが、そんな日ではありません。私たちに本当の意味での自由を与えるために神である一人の人が命を捨てるために来た日です。私たちはそれによって自由を得、その価値観に感銘した人たちが日本を変えてきたのです。自らのすべてを失っても戦った人がいるのです。これが「自らのいのちを憎むものが自らの命を得る」ということです。あなたは今、自らの命を憎み捨てることで、人々が自由や命を得られるために行動できているのでしょうか。「大儀を果たすために行動する」これが日本という国であり、私たち自身です。その人のためにという意識以上に自分の利得や守るためにしてしまうのです。人に手を向けるとき、自分のことを棚にあげて人を裁いてしまいます。私たちが自らのいのちを憎み捨てるのが本当の命を見出すことができるのです。一粒の麦になるために①自らの命を憎む。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」(ヨハネ12：25) 命を憎むとは自らがどれほど罪人であるかを知ることです。私たちは生まれたときから自己中心です。「自分が、自分が」です。周りから良く思われたいのです。人が服を着るのは心を閉ざし自らの裸の恥をあらわさないためです。これはアダムとイブから始まったのです。多くの人が自らで命を失っている今の時代、その中の一人でも私たちを通して救いに導かなくてははいけません。あなたの周りにはいます。それでも自らの命を得ようとしていると私たち自身がその中の一人になってしまうのです。罪を知ることが自分を憎むということです。だからこそ正しく歩む道に自分自身を導くことができるのです。自分の弱さ、情けなさ、どんな生き方をしているか、教会はこれを知るところです。私たちがどれほど罪人で汚いか、人々を裁いて生きてきたか・・・私たちの手はどういうことのために用いられてきたのでしょうか。自分の手を戒める方法は自らの命を憎むことしかありません。自らのいのちは自らで得られたものでないことを知るので。教会はあなたの痛みを刺すところです。しかしその痛みが開かれ明るみに出されるからこそ暗やみが光になるのです。明るみに出されるのですから恥ではありません。自らがどれほど汚いかを知るからこそ人を愛し信じることができるのです。これが聖書の教えであり幕末の人たちがやったことです。それでもまだあなたは自らの命を得ようとして必死ではありませんか。あなたが自らを得ることをやめ自らを失ったとき、神は栄光を表すといったのです。栄光を表すためには、あなたがしてきたことを省みて悔い改めなくてははいけません。何度も悔い改めなさいとは言われていません。本当に悔い改めれば100%赦され、赦された罪人として人々を愛することができるのです。赦されたことのない人に赦すこと、愛されたことのない人に愛することはできません。「私はこんな罪を犯してしまいました。赦してください」これが命を憎むことです。私たちは自らの命を憎むものでなくてははいけません。②立場を降りる(ピリピ2：6～8) 私たちの弱さが現れるのはプライドがあるからです。優しく言われると聞けるけど厳しく言われると聞けない・・・これはプライドです。言われていることが事実だからプライドが出るのです。あなたはあなたの立場を捨てることができますか。あなたの土台になっているものを捨てることができますか。私たちはなかなか捨てられませんが、それがどれほど弱いものかも知っています。「岩の上に建てた家・・・」この「土台」は「キリストの土台」です。愛の上に立った土台は壊れません。私たちの土台を捨てて愛のある土台の上に建てるべきです。私たちの内側にイエス様が生きているならあなたを指摘した人を裁くことはなく、赦しその人のために祈れるはずです。それでもいまだに「あの人のせいだ」「あんなこと言われた」と人を指差すのであればキリストがいるのではなく自分が中心にいるのです。あなたもあなたのあり方を捨てましょう。そうでなければあなたもあなたの周りも失うことになってしまうのです。自らを得ようとするのをやめましょう。言われていることが事実なら素直に受け入れましょう。そこで立場を降りられないと傷つけてしまいます。私たちの心は汚いのです。立派なのは自分の弱さを知って努力することです。立場を築かないようにしましょう。③蒔いた人を守る。(ヨハネ4：34～) 誰が蒔いてくれたのかを考えてください。自らを憎み立場を降りるためにこのことを考えなくてははいけません。自分の人生を自分で築いたものだと思っははいけません。多くの人があなたのためにまき、その根底にイエスキリストの愛があるのです。今あるものを無償で得たのであれば、後の人のために蒔くべきです。ただで実を得たのであれば一割は種にし、誰かのためにまくべきです。それができれば目の前にある畑から収穫できるはず。一割でいいのです。全て食べるから蒔けないのです。あなたの人生の一部を誰かのために用いる・・・私たちのために死んでくれたイエス様のそばにいて、自らの十字架を負うということが神様から求められています。重荷を背負ってあげればあなたの周りに悲劇は起こりません。自らを得ようとするから悲劇が起こるのです。生き方を変えなくてははいけません。自分に死にましよう。神はあなたの必要をご存知です。自らに死んだものはこの地で2倍、天の御国では100倍を得るのです。今、あなたの家はどんな家ですか。今日から自らを隠すのをやめ、プライドや立場を捨て、本当の愛を流す人生を歩んでいきましょう。(要約者：岩崎祥賞)